

熊取町埋蔵文化財報告 第18集

熊取町遺跡群発掘調査概要報告書・VI

1992年 3月

熊取町教育委員会

正誤表

熊取町埋蔵文化財報告 第18集

頁	誤	正
4 P	20 . . . 須恵器	20 . . . 須恵貫

熊取町教育委員会

は　し　が　き

現在熊取町には周知の遺跡が38ヶ所あります。

この数字は、古代から人々がこの熊取の地を生活の場として土地を開墾し、様々な文化や産業を築き上げながら地域を発展させてきたことを物語るものであります。埋蔵文化財は、私達がこの先人達の築いてきた文化に触れる事のできる貴重な文化財のひとつです。

しかしながら、近年は建設中の関西新空港を中心として泉州地域が急速に発展しており、日々様々な開発が行なわれております。本町におきましても例外ではなく、そのため貴重な埋蔵文化財が消滅の危機に直面しております。

このような中で、本町教育委員会では、破壊を余儀なくされる遺跡の記録保存を行うために、開発申請者等のご理解とご協力を得て、発掘調査等を実施してまいりました。

本書は、平成3年度中に国庫補助を受けて実施した調査成果を概要報告書としてまとめ、発刊したものであります。熊取町史ひいては泉州地域史研究のための資料となり、わずかでも文化財保護活動に寄与できればと念願する次第であります。

最後に現地での調査及び本書の作成にあたってご尽力、ご教示をいただきました方々、並びに関係各位に対し感謝の意を表します。

平成3年3月

熊取町教育委員会

教育長 七里 弘

例　　言

1. 本書は、熊取町教育委員会が平成3年度国庫補助事業（国補助率50%、府補助率25%、町補助率25%）として計画し、町史編さん室が実施した熊取町遺跡群緊急発掘調査概要報告書である。
2. 調査は、熊取町教育委員会町史編さん室、阿部　　真を担当者とし、平成3年4月1日に着手し、平成4年3月31日をもって終了した。
3. 本書における方位は、地図以外は磁北を示すものとした。
4. 調査の実施と整理にあたっては、阪口雅美、安福佳代の参加を得た。
5. 本書の執筆・編集は阿部がおこなった。

目 次

はしがき

例 言

目 次

第1章 はじめに	1
第2章 地理的・歴史的環境	2
第1節 地理的環境	2
第2節 歴史的環境	2
第3章 東円寺跡の調査	7
第1節 遺跡の位置と既応の調査	7
第2節 91-7区の調査	9
第4章 終わりに	10

挿 図 目 次

第1図 熊取町の位置	1
第2図 大浦中世墓地出土遺物	4
第3図 熊取町内遺跡分布図	5・6
第4図 東円寺跡調査地点	7
第5図 東円寺跡調査区位置図	9

図 版 目 次

図版第一 東円寺跡91-7区

熊取町遺跡群発掘調査概要報告書・IV

第1章 はじめに

平成3年度の熊取町内における土木工事等による埋蔵文化財の発掘調査届出件数（平成4年1月末現在）は19件であった。その内訳としては、ガス管理設工事等を含めた公共事業関係が15件、事務所建設及び共同住宅建設等の民間開発に伴うものが3件であり、個人住宅建設に至っては1件を数えるのみであった。これは昨年度の同時期（33件）に比べて全体で13件の減少であり、ガス管理設工事等を除く住宅建設等の民間開発行為に伴う届出で16件の減少である。周知遺跡範囲外の土地開発の試掘調査依頼を含めて考えたとしても、今年度の当町内における民間土地開発の件数は例年になく極端に少ないものであった。しかしながら、これは当町内における民間土地開発が頭打ちとなり、今後減少に転じて行くことを示すものとは考えられない。関西国際空港の建設・開港を機に泉州地域の土地開発は今後も急激に進んで行くのは目に見えて明らかであり、当町においても例外ではない。今年度の土地開発件数の減少はあくまでも一時的なものであり、その一因としてはバブル経済の崩壊を要因とする住宅価格・地価急落の結果、事業者が一時的に宅地開発等の土地開発を控える傾向に出たためとも考えられよう。したがって、来年度以降についても少なくとも例年並もしくはそれ以上に増加するものと思われる。



第1図 熊取町の位置

第2章 地理的・歴史的環境

第1節 地理的環境

熊取町は泉州地域のほぼ中央部に位置し、東を貝塚市、北・西及び南を泉佐野市に囲まれた海岸部分を有しない町である。町域の総面積は約17万平方kmあり、南北約7.8km、東西約4.8kmと南北に長く、木の葉形を呈しているよう見える(第1図)。

地形については、南部は泉州地域の基本山地となる和泉山地が占め、北部は和泉山地から派生する和泉丘陵とその縁辺に発達する段丘部が大部分を占めている。面積比では山地41%、丘陵24%、段丘23%、低地12%となり、山地・丘陵部が総面積の約3分の2を占めている。

河川は見出川・兩山川・住吉川が町南部から北部に向かって流下しており、それらの対岸に洪積地が狭小ながら形成されている。小河川が多いのに加えて河口部も他市域を流れるため年間流水量は多くなく、又、瀬戸内式気候区の東端に当たるため年間降雨量も少量である。そのため現在においても町内各所に多くの灌漑用溜め池が存在している。

第2節 歴史的環境

熊取町内における遺跡数は現在のところ38箇所挙げられているが、当町の埋蔵文化財調査は近年調査の途についたばかりであり、文献・建造物等の調査に比べて遅れており、遺跡範囲や様相の不明確な遺跡が多い(第3図)。

旧石器・縄文時代については、従来より池ノ谷遺跡が旧石器時代の散布地とされているが詳細は現在のところ不明である。また成合寺遺跡では縄文時代の石鏃・スクレイバー等の石器類が出土している。

弥生時代では、成合寺遺跡で石鏃等が発見されている他、東円寺跡の調査においても石鏃・サヌカイト等が出土しており、今後東円寺跡周辺の低位段丘上に同時代の遺構・遺物が検出される可能性がある。住吉川流域の低位段丘上に位置する大久保B・大久保E遺跡からは同時代後期から庄内並行期にかけての遺物・遺構が検出されている。特に1989・1990年度の大久保E遺跡の

調査では、検出された溝等の遺構から、庄内並行期に比定される土器が大量に投棄された状態で出土しており、今後の調査により周辺域から当該期の集落関連遺構が検出されるのは確実である。

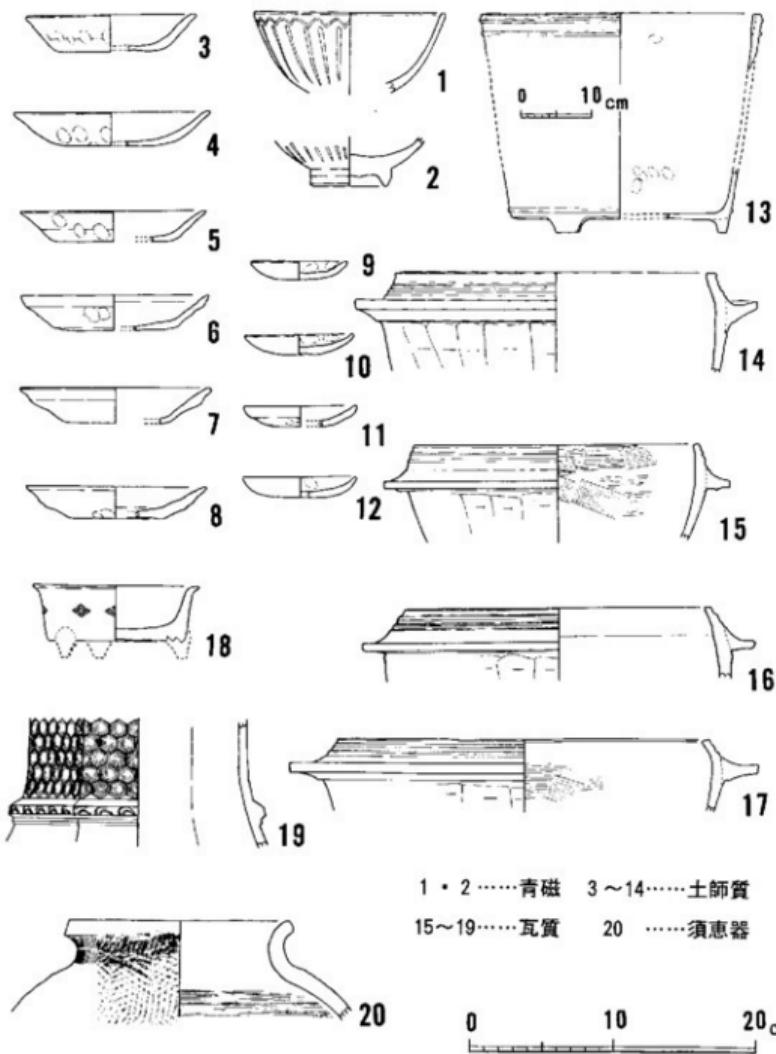
古墳時代の遺跡については遺物散布地が數ヶ所存在するもの、遺構は現在のところ確認されていない。また、古墳参考地についても2ヶ所存在するが詳細は不明である。

奈良・平安時代では、東円寺跡の調査から8世紀代の掘立柱建物跡が数棟検出されている。また、平安時代末の軒丸・軒平瓦等も出土しており、この時期には当地に寺院が建立されていたことが窺える。

中世については、東円寺跡の調査において13世紀から14世紀にかけての掘立柱建物跡が現在までに10棟以上検出されており、奈良時代以降中世に至るまで東円寺を中心としたこの周辺地域に村落が形成されていたことを裏付けている。成合寺遺跡は14世紀代を中心とする大規模な中世墓地遺跡であり、約600基の土壙墓群や数棟の掘立柱建物跡が検出されている。又、大浦中世墓地からは13世紀から15世紀にかけての墓地関連の遺構・遺物が検出されており、1990年には多量の15世紀代を中心とした遺物（第2図）と共に、享徳4年（1455）銘の入った五輪塔の地輪が廃棄された状態で出土している。雨山城等の中世城郭は参考地を含めて現在6ヶ所を数え、又、中世寺院跡に関しても5ヶ所の推定地を数えるものの本格的な調査はなされておらず詳細は不明である。

近世では、降井家屋敷跡の調査で旧来の降井家の屋敷地を区画していたと考えられる溝を検出しており、近世以降の日常雑器類が出土している。

古代以降における当町域の土地利用については、既往の東円寺跡の調査等から奈良・平安期には段丘部の部分的な開発の進んでいた可能性が高く、丘陵部の一部や段丘部の全面的な水田・耕地化、及びそれに不可欠な多くの灌漑用溜め池の築堤については中・近世を通じて成されたものと推定されている。但し、これについての考古学的実証は成されておらず、急速に土地開発の進む中、今後文献及び水利施設関係も含めた合同的な調査が必要といえる。



第2図 大浦中世墓地出土遺物



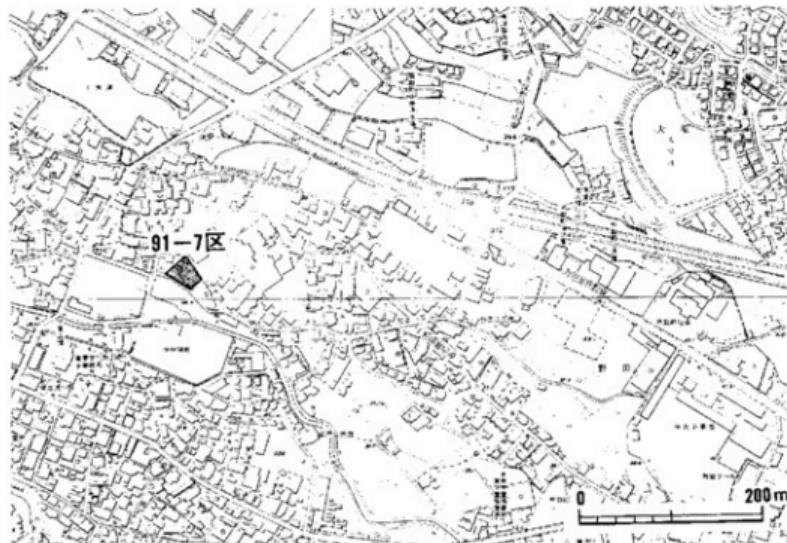
第3図 熊取町内遺跡分布図

第3章 東円寺跡の調査

第1節 遺跡の位置と既往の調査

東円寺跡は熊取町の北東部、熊取町大字野田に所在し、現在の熊取町役場及び公民館の付近一帯に広がる遺跡である。地形的には、現在の大井出川（住吉川）の右岸域に形成される低位段丘上に立地している。遺跡の範囲は東西約900m、南北約400mあり、熊取町内の遺跡群の中では最も広い範囲指定面積を有している。

遺跡の名称である東円寺（東曜寺）は熊取町役場及び公民館の前面域に所在していたと考えられており、東西約150m、南北約100mの範囲に「トヨジ」・「豊寺」・「東永寺」・「堂端」・「堂ノ後」等の小字名が残されている。この小字名の残る区域の本格的な発掘調査は現在まで殆どなされておらず、また周辺域の調査においても当寺に直接関連すると考えられる遺構は殆ど検出されていないことから、東円寺については解明されないでいるのが現状である。



第4図 東円寺跡調査地点

但し、周辺の調査から平安時代後期に比定される軒丸・軒平瓦等が出土しており、少なくともこの頃には東円寺は創建されていたことが知れる。

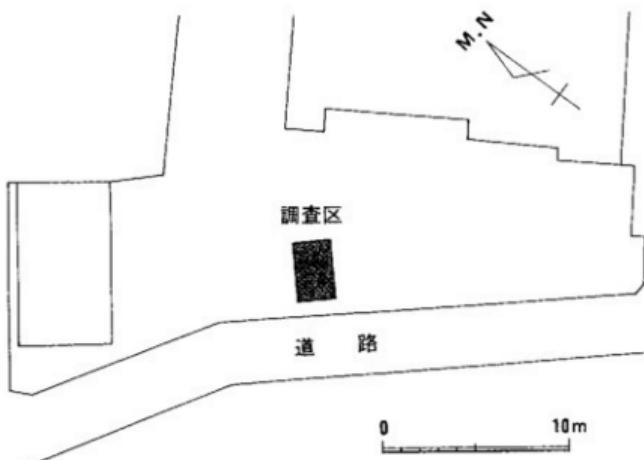
寺院関係以外の遺構・遺物としては、大阪府教育委員会の行った国道170号線に伴なう発掘調査や町教育委員会の88年-1区、90年-2区の調査で弥生時代と推定されるサヌカイト片、石鐵等が出土している^⑨。

古代では、87年-1区の調査において8世紀代の掘立柱建物跡4棟、土壙墓2基等が検出され^⑩、その隣接地である89年-5区の調査においても8世紀代の可能性のある掘立柱建物跡が数棟検出されている^⑪。

中世の遺構・遺物では、東円寺（東曜寺）の寺院跡を中心とした周辺域に13世紀から14世紀にかけての掘立柱建物跡が検出されている。大阪府教育委員会の行った調査において13世紀後半と推定される掘立柱建物跡が1棟検出され^⑫、又、町教育委員会の87年-5区、88年-1・6区、88年-5区、89年-5区等の調査において計10棟以上の掘立柱建物跡が検出されている^⑬。特に88年-1・6区の調査では、掘立柱建物跡6棟や焼土壙、土壙、溝の他、土器溜りが検出されており、この土器溜りからは13世紀前半に比定される瓦器椀・皿、土師器皿等が多量に出土している^⑭。この調査地の隣接地の小字名が「多々利（たたり）」「たらり」ということから、検出された焼土壙及び建物跡等は鍛冶関連遺構であり、かつ、それを生業とした者の屋敷跡の可能性が考えられる。

近世においては、東円寺廃絶の後に当地周辺は整地を受け、水田・耕作地化されており、現在の土地利用に至っている。

既往の発掘調査地は主に東円寺跡の中央部周辺及び東側部に集中しており、今回の調査区（91-7区）の位置する西側部については、東側部に比べて遺跡の状況が把握されていないのが現状である。



第5図 東円寺跡調査区位置図

第2節 91-7区の調査

・調査地地番 熊取町大字紺屋170番地

本調査区は東円寺跡の西端部にあたり、住吉川の右岸約40mの低位段丘上に位置している（第4図）。又、対岸には江戸初期建築の重要文化財中家住宅が所在する。本調査は個人木造住宅の建て替えに伴う事前発掘調査であり、現存する木造住宅を取り壊した後に調査区を設定し、重機と人力による調査を実施した（第5図）。

層序は、約20cmの客土の下に15～20cmの旧耕作土が存在し、北半部については旧耕作土下に床土（約5cm）、整地土（約30cm）が存在していた。東半部の旧耕作土及び北半部の整地土の下層については、有機質を含む砂質土と粘質土が交互に層を成して自然堆積しており、水田化する以前は当地周辺が低湿地状であったことが窺われた。

遺物包含層及び遺構面は検出されなかった。

第4章 終わりに

今年度の土木工事等による緊急発掘調査は件数かつ面積的に見ても例年になく少なかった。第1章でも触れたとおり、このことは今後当町における土木工事等の開発行為が減少の傾向に向かうことを意味しているのではなく、あくまでも一時的なものであり、地価の安定に伴い、開発行為が再び急増していくことは近隣市町の状況からしても必至である。特に、当町は近年よりベッドタウン化の傾向が著しく、今後も共同住宅・分譲住宅建設等による土地開発が大規模面積で行なわれる可能性が極めて高い。

そのような社会的状況下に置かれているにもかかわらず、町内の遺跡群についてはその大半の遺跡の性格・様相が未だに把握できていない状況にある。そのため、急増する土地開発への対応と文化財保護の側面から、町内遺跡群各個のより的確な遺跡範囲確定を含めた状況の把握が急務とされており、文化財技師の増員等による早急な埋蔵文化財調査体制の充実を含めて、今後の熊取町の文化財行政における重要課題となっている。

註

- ① 大阪府教育委員会『東円寺跡発掘調査概要報告書・II』1984.3
熊取町教育委員会『東円寺跡発掘調査概要・III』1989.3
" 『東円寺跡発掘調査概要・VII』1991.3
- ② 熊取町教育委員会『熊取町遺跡群発掘調査概要報告書・II』1988.3
- ③ 熊取町教育委員会『熊取町遺跡群発掘調査概要報告書・IV』1990.3
- ④ 大阪府教育委員会『東円寺跡発掘調査概要報告書・I』1983.3
- ⑤ 熊取町教育委員会『東円寺跡発掘調査概要・II』1988.9
" 『東円寺跡発掘調査概要・III』1989.3
" 『東円寺跡発掘調査概要・V』1989.3
" 『熊取町遺跡群発掘調査概要報告書・IV』1990.3
- ⑥ 熊取町教育委員会『東円寺跡発掘調査概要・II』1988.9

図 版



東円寺跡西側周辺（東より望む）



91-7区 土層断面（東壁）